物語　十二

へ 12
4108
12

門 人 12
4108
12

宇治拾遺物語巻第十二目録

一 達磨見天竺僧行事
二 提婆菩薩参龍樹菩薩許事
三 慈恵僧正延引受戒之日事
四 内記上人破法師陰陽師紙冠事
五 持経者叡実効験事
六 空也上人臂観音院僧正祈直事
七 増賀上人参三条宮振舞事

門 へ 利 10
號 4108
巻 15-12

八　聖寳僧正渡一条大路事

九　穀断聖不實露顕事

十　季直少将歌之事

十一　樵夫小童隠題歌讀事

十二　高忠侍歌讀事

十三　つらゆきうたの事

十四　あづま人歌之事

十五　河原院融公霊住事

十六　八歳童孔子問答之事

十七　鄭太尉事

十八　貧俗観佛性冨事

十九　宗行郎等射虎事

二十　遣唐使子被食虎事

二十一　或上達部中将之時逢召人事

二十二　陽成院妖物乃事

二十三　水無瀬殿むささびの事

佐藤藏書

むかし天竺に一寺あり。僧徒おほかりし。達磨和
尚このあたりに入て、僧どもの行をうかゞひ見給ふ。
或房には念仏し、経をよみ、さはぐもあり、ねぶるもあり。或
房を見給ふに、八九十なる老僧の只二人むかひて囲碁
を打。仏をもおがまず、経をもよまず、囲碁をうつほかは
他事なし。達磨件房を出て、他の僧にとふに、答ていへ
らく、此老僧二人若きより囲碁のみにて、外事なし。
すべて仏法の名をだにきかず。仍る僧おほくいみいや
しみて、交会する事なし。むなしく僧供を受
るのみにて、外道のごとしと云。和尚これをきゝて、さだ
めていかゞあらんと思ひて、この老僧のかたへ行て

㊃一条桟敷屋鬼の事

く圍碁うちあり棊をせられど一人も立り一人ハ居たりと見ゐるに忽然として失ぬあやしくかれこれなどよの立る僧ハ極かくりとて見ん爲などにあり居たる僧にもせぬこれぞまさしかきねもて遁べてとおもく圍碁乃かの徒事なりとうき給ふに證果乃上人よそのゆかしきまこの趣人をよびよせんとて行に老僧養いよく年来この碁より外他事なし但黒勝と勉も我煩悩勝ぬとかなしく白勝時も菩提勝ぬと打よ隨て煩悩の黒を失ひ菩提の白くんせを滅ひふこのみのかとぞくよろこびて證果乃身をとなり給ひしといふ和尚房をとぞく他僧よかわらぬれ

きれも年来にく見のうちに徒ら人く後くちいして是れ貴き事ありとなん

昔西天竺に竜樹菩薩と申上人まします智恵甚深也又中天竺に提婆菩薩と申上人竜樹乃ち恵ふかきよし聞給ひて西天竺に行向て門外に立ちて案内を申さんとし給ふところに御弟子ほかより来給ていかなる人ぞと問ひ給ふに提婆菩薩ものもいはず鉢を大師乃ち恵ありくましされどもちて水を器に入て出されたりこれハ竜樹の御弟子をと忘乃きて中天竺より来たるくさいろをそなへたりこれなしかべきよしの給ひ弟子竜樹に申給ひて小器よ水を入て出さる提婆菩薩是を見て衣乃襟より針

を一念にいふして此乃火に入べからずとかまへつるが堂を
みなくつろぎ志由大に掃きよめて志らしくましまして
ましまして房中を掃きよめてつまじき給へくまつり給はず
あるじ思ふにかはるべき給へ事とは逐ぶより入るく
ときさへ給ふ人も癡鈍らん喉咽さんをかんとし侍へきれ
まこの人斜をとくあれさまふよ大師然るまま申なく
うやまれ給ひてあひていかなるとわれとかりぬて乃ちすり
大師よりたれてやそれぞれしく給かくかなとあつくつる我
智恵ある小精乃内のなれましも志ゆかの海万里をもとの
まで来ちる名をとうかへよとてあらとあるやつるありよ
人ぢしれ給をとちりて斜を水よつまでそこのへんそことは我

ちりばかり乃智恵無くみんなぢが大海の底を極め
ともあり給へんぢら年来随逐されどもこれは給へ給志ら
むじしても連球をふ上人のきらし先へくきさまるぞも
まらちて給をとと志るふまちはき恵乃あるとびまさと
やうしもかてもら執のもとう給をもおよく給文を幾
れ給く本をまれちく中てんぢくるはめて生まれ
ましとと候ん

慈恵僧正良源（永観三年正月三日入滅 七十三歳と江見へ也）座主乃とき受戒行ふべき
定日例乃ごとく催儲て座主の出仕をまち侍るところに
途中よりにはかにかへり給へば共乃ものどもこゝろえ
ずいかなる事にかとあやしく思ひまどひ衆徒諸識人も皆集り
れ大事日乃さまたげまさしきことなりといひあへりく
さしせまる日に障をなし此日を延引せし先例なしとふるべ
からずと謗するほどにかゝりけるに諸堂代御孫まで
あとぐかきまゐり集て受戒あるべきよし思ひゐるに
とゞ使として横川小綱を使にて今日乃受戒ハ延引
ある重き事に依て催に随て行ふべきなりと仰下
しきれたとおもふにようて留給ずとて梅使まなく

かゝる御人をもしらで法花をひらく事の向てこれよりし我
やせとぞうけ給つるぞといふあつまれる人々みな
くしゆ給へりけるぞかしかくいふ程に延引しぬる程
にわかに時ばかりに大風吹て南門のうへより倒れにし
かれども人々みな打ころされなましと感じ
のゝしりけり

内記上人寂心といふ人ありけり道心堅固の人なり
堂をも造り塔をも立つる最上の善根なりとて勧進
せられけり材木をば播磨国にゆきてとられけるに
こゝに法師陰陽師紙冠をして祓するを見て
あわてゝ馬よりおりてはしりよりて

なにわざし給ふ法房ぞといへば祓し候なりといふなにゝ
しに紙冠をばしたるぞといへば祓戸の神達は法
師をば忌給へば祓する程しばししてはべるなり
といふに上人声をあげて大になきて陰陽師に
取かゝれば陰陽師心得ず思ひて祓をしさして
これはいかにといふ祓させける人もあきれてゐたり。
上人冠をとりて引やぶりてなく事かぎりなしいかに
しりて法房は佛弟子となりて祓戸の神達にくみ
給といひて如来の忌事を破りてしばしも無
間地獄の業をばつくり給ぞ誠にかなしきことな
りたゞ寂心をころせといひてとりつきてなく

あと物ぞ卋くし陰陽師乃いそく於かをもし給く
事を乃理あり世れるこく帝まへさうまさそてハせき
くかりし乃あとく仕ありきくしだまひにまさ継し
てハは壽子をかなし あれもらハ乃ちぬを續ら
むる心あまれど一人にもあるだ陰陽師のかたち
に俗まこと俗人乃あとくあまこをぞ後世れさいで
とあらしく俗まこどもよれかきくれりて俗まへやう
に俗ならこいぬど人乃いふ處くられたさもあれいで
三世如来の説着に疑ひなき甚だ稀不幸に出会くし
くかなられあとし給ひし堂流くらん料に勤そく
あ流光そる抱ぎもとあんちにあんせぶ一人并に勤

まことし堂ある造に勝つもろ功徳なりとされとく出す
供給りそろして材木をとんとて勤をしあいまみたる地を
らあれきこびにせてこ乃陰陽師にそこ世にさらめ
て京によ行になり
むかし閑院大臣殿冬嗣三位中将にておはしまし時
まうハ病をわづらひ給ひけるが御名をいふ所に
叡実といふ持経者なん童病をよく祈落しける
とき人まゐれとて乃持経者に行きんとて行給に
荒見川乃ほどまでまかりぬ給ぬちハちかく
きれてさまよりかへるを絶なかしとて給へば
て御名にましして房の簷に車をよせてあん

なりけるに入道よくして蒜（ひる）を食給ひとや申しけるに
ぞおもしろで上人をみんとてまゐりし只今酒のみかへる
ひとたびみれ給ふじとありけれど、さらでだにやつる
行人とて房の蔀（しとみ）下に立てる数珠ありてあぢきなしとおもひて
もちて入道へしやあまりにさて入行ぬ持経者沐浴も
くとむらへとありてや合ぬ。さるべき僧の痩（やせ）さらぬ
けふくみえぬに貴きなり。僧も風をきく給ふる
に醫師のやうに定められて蒜をと食して侍りされ
にかなはぬは病ひへいかでかまでさもなくて侍るなり。
法花経は淨不淨をきらはぬ経にて候ふ。まして六
にみまゐらせてつらん何条事か候ふべきとて念珠を

押摺てくるくるとおしもみて声いでむとするをきゝし。
法頭によみを入て、声はさばかりならねどさせやらく
寿量品（じゆりやうぼん）を打出してよむ。心はいとおもしろし、さぞ
尊き事もあるまじきとおぼえしに、御前に候ひし人も
く高声にて誦す。念じあへりし中にあはれなり。持経者同
より大声にて誦。をかしくと思ひして、かくこそかぎり
なし。その時、さばかり尊くぞおぼえける。さて、さらに誦り
なくよりて、あまり行ぬ、後はせまで聞くべくとて人より
行ぬるを、遂にはこの人有験（うげん）の名は、天下にいひ給ひける。
きこえけり
むかし、空也上人、申べき事ありて、一条大臣殿に

さいつとて䑓人所ようくなくり。餘慶僧正又象
合し給ひくるとも肌どし給ふどに僧正の給ふ乃
臂(ひぢ)いりめしておりくわへふるさ上人のいそく我母物妬(ねたみ)
して幼(よう)かり乃時斤よもを取て投(なげ)給しかどにおりて侍
そぞやや侍し。幼ち乃ば斧乃ちとおれむかし侍るに
かしまく左りて侍る右よおり侍らまじりぞといふ。
僧正の給ふこそ貴き上人りてかん天皇れは
子とまて人々を出せばとかくしきなし流臂まとに
おまつしやさんなめ出。上人云む焼給へし寶に貴
侍なんこ乃かおらし給へとて近く寄まへ殿中此人々
湊く寄り道綫を流す乃そき僧正頂より黒きかり本

めさして加持し給ふにまもなくあつまりてまがれるは
じまるとみえ乃ぞぬ則右乃臂れいよくになりぬ。
上人涙をながしてこ度礼拝して見人々みなのく感き
戯し或はなくきけり。其日上人共のよりかき座に
人是し来るとぞ人は縄をとりあ懐しる座あり為
に落さるみるきき縄をひ引き乱く壁つらにくらべ
て古堂乃屋なか去ける壁を塗まつりを泥へ人は
血乃涙をとりみ清めくおれにあやれく獄れよ
あく二人まりこ人は又古乃落葉なるをとりおれあつ
めて紙にすきて經をかきうつしてまつるそろ乃
又古乃屋をと臂なかきうきせる布施よ僧正まな

さもあれど後にびく才子になして義観て
お経を行ひあさがりけるにやとなり
むかし多武(とうのみね)峯に僧賀上人とて貴き僧おはし
ますがきこしめて仏武にきらびしくおはしましけるとぞ
まゝ名利をいとはれて頗物ぐるはしくなんおはしける
まれ給ひし三条大きさいの宮尼にならせ給ふとて
其戒師乃上人をめしにつかはさるゝにまゐられけり
其をゆかしく僧加えてそのまゝしまさんには
しさてまゐりたまひてさてつまきり才子のことどもこれは
つられをも嗅(いうつ)らく打ちさすれなんどやきたなきさまへて
みな妙乃わらはに似て狂をすくさかしさとまで

あやしき声にかゝりあはてがくして宮に
みな人よりも帝達もみなこれに従て人のわれく
尼になりの後に上達部僧どもあまた
あはせたる内裏の清涼殿などさぶらひ
まこと乃上人を召しておがまんとて
をあつかひけるにあんれまゐりて清
まへになめしかまへて此き帳乃もとにあまりて出
家乃さかりにしてめでたききかぬ
おはして乃上人はきたなき
道[illegible]にはくあくとかきりあしもさみかへりて
おんとするまゝに上人のるまたれにて増賀を

しもあれからよ先生は何事ぞなじくらまゐけるぞれ
もしたくみなき拙筆なりと思ふし笑ひしせるう
人の心のうちは大方にいへども筆は拙きなれ共
しらずともなりすとるものをとて今は御座の内ちう
く此女房共らがかれにまで御殿上人僧共らこまぞ
まあさまのしく見くらちくあさてかがゆゑの所ちも
さしあり貴さもえかうせてものく聞にしあせあ
へそくすまもあしねんちれさて上人さかり出ぬん
そて艶のきあちせてぞよし胸のうちあて風もそく然
くうまた共らず癩病のことけっまうまはざいる申すくは
ける様のとふさとめしはつきてもお稀くはつる墟がくある

ていへどもいつぎ侍るとかやはなりとてかつてさ侍りし西墓
の尤のゝに法は如く尻をかくせぞて稼の臼よりもあを
つぶれ知りまじりちら見る貞ちく鬼事め事りなりし
流れおまでさてゆゑとかき殿上人のもらの乃しちる事
かれ共らし僧共らはかられをのぐるれを先しちとる
事と傍やきるとかなりにおとにあましてものくるれ
まよどぞと始るまれまれどられまつまさくさも貴き物か
思てはつよく申すなとせり
むかし東大るに上座法師のいらく共れしき
あまさらば法ゆたうりも人ま独あくなる事様
さんだん堅貪まつこねなく兄しまれぞらん附尾宗僧

正乃りらあきて僧りよて松ちしあるべきめ乃上座ハお
しむ罷乃あさやの披りよさてりさとあらがんを
さう出きりけ房何事あてさらんハ大衆よの僧供
れりんとりれ名れでも上座鬼孫抱あらがれしてき
肩ハ寺らんよ僧供きりんもさ申しさきとあらし衆
中りて如くいゐきを後ふにもとも寺へざらん者ハら
かしと思く而きめ大すまのしきとなと山よりハぬるし
てい下風くきむ前なる日ま裸りよて寺うさ紀たり
もとして干鮭太刀にもさて風せさる女牛に乗て
一条よ大路をと大宮よると河原まてむれて東大寺ハ
座寶ハあると寺よかく名打りてさるとおんいまちあ

こ乃法もるハ大衆よりも下部よりてなんなりまかせ
むとつよ心中にさりをもしらもせでとも思ひまかなくあ
らぬよ座寶ハ大衆をあれをもよりあつあくくなりあ
しそ食ちらて佛ぞやかててあきねらの数ちかくなりて
一条富小路よ桟おちちて座寶ハすとてらん見んとて
大衆あれあ法まりねよ上座をあるきてうらくあ
まて大路乃見物ハものどもかびまちしてこし下
何事ぞあらんと思く頭さし出して西乃方能をなさきハ
牝牛に乃りける法師の裸なる干鮭を太刀にて
きて牛ハ尻をそらくとれく尻よ百千の童ぞつき
て東大寺乃座宝てて上座とあらがめくて後を

とはしめくいれまうすもしれ祭りはおほきに読経す
る輩あまたありけるに大衆をあつめけるにうてこの社
は大備供養ありけるに王乃末の御門さまにおいて
して度宝はずなれど所をもとめてくる人をみちびくを
にしてもあまたのもれ人のまへの世にいふ流貴人ありしを
むかしそのめしかはして備ふかせてけりしあきらかせましとまれけ
つまびら乃醍醐まし寺乃備ふの建立なり
むかしあやしくをこなふ上人ありきつゝしおほくとゐ
ちそ年来にありぬ法門きゝて既つて和泉にあ
りたまへるなかに貴き残る寿乃弟子をれく合はける物
まかれまうちさ云ひ達ちあつまりてこの庭乃なかんと

くわひかれて兄弟にいとまうして然れにとゆきて穀
断いく年よにあらで行ひとよばれ断食いばくよりまち
終まいは又十余年にまかりかくさぬとやのをとすくく
一人乃穀上人のいとく穀断乃屋ほとりいよりかはら
あるらん例の人りはりくるかせるまんぞいそ行ひてくらん
とゝへども二三人待ちてそ行ひてられて穀屋をとゆかんく
痢をうきはうがあやしと思ひて上人のおはするにはまいて
内せらるこゝろをきらんとられてゆきみれは下銭判あき
くられだ土銭まあまりありとて布袋に穀銭入へく
まきはりらきに達へくをゆ銭はかくさて穀糞は屋く
とゝのあまりて乃志ありらんきれは下にきせとう

ものともなくちはゆきすぐともしらにあふくうせよ
ありけりとなん

今はむかし季直少将といふ人ありけり病つき
てのち少しおこたりて内にまいりたりけり
公忠辨乃掃部助にて蔵人なりける比の事也
みだり心ちまだよくもおこたり侍らねど心
もとなくてまいりつる後はしらねどかく侍て
侍ればあさてばかりに又まいり侍らんよきに
申させ給へとてまかり出ぬ三日ばかりありて少将
乃もとより

くやしくぞ後にあはんとちぎりけるけふ
をかぎりといはましものを

さてその日うせにけりあはれなる事のさまなり

今はむかしかくし題をいみじく興ぜさせ給ける御門乃
ひちりきをよませられけるに人々わろくよみたりけるに
きこる童のあか月山へ行とていひけるこの比
ひちりきをよませさせ給ふなるを人のえよみ給は
ざんなる童こそよみたれといひければ具して行童
部あなおほけなかゝる事ないひそさまにも似ずいまいま
しといひければなどかならずさまに似る事かとて

めぐりくる春々ごとにさくら花いくたびちりき
人にとはゞや

とられまいらせ候ふさ候ふもしにてもくやみ候はずそ
いまはむかしながら思ひとられまゐらせ越前守乃所よりつかはし
たまふ幸なりとけるに給乃夜昼なくなみだがちなるにかなしく
かなしく物おもひなりけるに雪乃いたく降る日なり
そこにはなれかゝりたる雪の朝となりてものさびしかりけれ
何事を観じてか遙へまかりけんやがてつくづくながめけるうち誠
よ見えとひとつは行きとこそなくあるべきゆへ出家なされけん
あく
きゝつがひも我に身のなかに流れてゆきまゐて
うらもなくへ立ちとき思ひてせきあへずなりけり
とまみえまれなれどいかにもかなしくぞおもひ給ひけるぞ哀なり

ねがはくはたちまちに方をあはれみ候ひてうきよの衣にも
ましうかへらしき縁を世にまた逢ふ事二なきうき世
つらくてかいなくみるよりはよしさもなきみゆくもあるまじぬ侍よ
りゐられそうなる事をも見捨て給へども御てもいかにも縁さきあやし
かゝりてもそれまでる儀なくさ地にてあさ候しかりまかりまし
ませてこの儀ある縁はみてしさらときまれえある。しかりて
りかんと思ふ縁をさせまれども庭の上にかゝりさ地にありあり
あまり我をこゝへ行きてこの思ひ立ちける夜は二度ずるせら
をそてこれきる庭のいにしへまつる老ねる所れは不幸と
しかれくさゆることの生れ事は庭くをなきところは
いめかの後生後くみいかにして法師となりけり

なんと思ひ侍れど戒乃師にたてまつるべき物の候はねば
いまゝですごし候つるにかく思ひかけぬ物を給はりたれば
かぎりなくうれしく思ひ給へてこれを布施にまゐらせ
候なりとて法師になさせ給へと涙にむせかへ
りてなくなくいひければひじりいみじうたふとがりて
法師になしてけりさてそこよりゆくかたもなく
てうせにけり。あり所もしらずなりにけり
いまはむかし。貫之が土佐守になりてくだりてあり
けるほどに任はてのとし七八ばかりの子のえも
いはずおかしげなるをかぎりなくかなしうしける
がとかくわづらひてうせにければなきまどひて

やまひづくばかり思ひこがるゝほどに月比になり
ぬればかくてのみあるべき事かはのぼりなんと思
ふにちごのこゝにてなにとありしはやなど思ひ
いでられていみじうかなしかりければはしらにかき
つけゝる

みやこへとおもふにつけてかなしきは
かへらぬ人のあればなりけり
とかきつけたりける歌なんいまゝで有ける
いまはむかし。あづまうどのうたいみじうこのみ
よみけるがほたるをみて
あなてりや虫のしりに火乃付て

こんむすめもみくるしくなるぞ
あげさん人の所うにはよまんとて宴をはらいきかが
よろんをもてはやしけるとぞ
今はむかし河原院は融の左大臣の家なりしが陸
のくの塩がまのかたちをつくりて塩をくみよせ
てしほをやかせなどさまざまのおかしきことをつ
くしてすみ給ひけるが大臣うせて後宇多院
には奉りてまつりけるなり延喜の御門たびたび行幸
ありけりまだ院のすませ給ひける折なり
夜中ばかりに西の対の塗籠(ぬりごめ)をあけてそよめ
きて人のまいる様におぼしめされければ見させ給へ

ば昼の装束うるはしくしたる人の太刀はき笏
とりて二間ばかりのきてかしこまりてゐたりあれは
たそと問はせ給へばここのあるじの翁なりと申
融の大臣かと問はせ給へばしかなりと申す
さはなんぞとおほせらるれば家なれば住み候ふに
おはしますがかたじけなく所せくおぼえ候ふ故
いかがつかまつらんと申せばそれはいといとことやうの事なり故
大臣の子孫の我にとらせたればすむにこそあれ
わがおしとりてゐたらばこそあらめ礼をしら
ずいかにかくはうらむるぞと高やかに仰られ
ければかいけつやうにうせぬその折の人々なほ

後かしこきことにおぼえしまゝにのたまひ。さらぐれ人々と
それがしに逢べくさ候にもくるしからにいひてん
辞しつゝ去ぬ
今はむかし。ある後出しに孔子のみちをとり学者のふ
まへなりける者あれぬ孔子にとひて候ふ。日
乃入所と洛陽といづれが遠きと孔子いはく、日の
出る所は遠く見ゆ洛陽見えちかし。学者の
やゝ日れ出入をみるぞ洛陽はまだ見ずされ
ば日れいづる所は遠く見えちかし洛陽は未だ見ずと申す
とや孝通なし孔子かしこの童かりとかんじ給ひき
或孔子は物もしれて流人ほどなきはれくそれ

か流人をのちのまさにかくされまゐらせもの は
あらねなりまうさとそく人いひける
ひまでもかく親の孝をまなのわかきを救ふ
よ本をとりてかへ候ふとてかふ孝ならぬ人なるを
志ゆるしぬがちをひすき孤になりてむかしの流に
ゆくに翁ははるかなりのせなきこしかた流より
流を川の又ははまさし身に手斧をとりて入るかわき
臣もしきこれのせなきて舟によまきつもりの汁をと
乞も絵かとれにして淡によなりて大候まににきこへ流し
く大臣よになりて後つかへかりの者と鄭大尉
とそいひける

いまはむかしもろこしの西んしうに一人のおとこ
ありけり家貧しくして宝なし書をよみ学問しけるが
よるべなしをもとめしかどもこゝろざしとならずいたく
く年月をへかすれどもある僧にあひてかく
とひけるに智恵ある僧によく
むかしある僧海寺にあらんと思ひて云く満
このたびは生をいかにして宝をゆへに後世を
よろこびのむねをとひけんといふに乃ちそのこたへは
とひて後生はいかにとて僧のいはく申けるは
何をかとへといはんなにごとよりもまづ仏法を信
も家あるものはいかにもせよとおもひて

たゞ慳貪をたもちて金をあつめてものをむさぼることなく信
なしさまのさんぜんぎやうをよみてみなまふしたとえいへど僧の申すやうに
おまへ仏なりとて仏と申してなし仏をしんじて我身の
故よ仏といひまふすなりといふにてもよく我がことなく
おぼえてろうさうおのれとたのみてよくよく
思きかれし梵天諸天へきこえて満ちたもの
らさるに宝出しまいて宝のうちゆゑのよもすがら念をと
となるにいよいよ仏をも念じ入て浄土にむまれん
さいごまでも乃ちおとなしく見えける人あり
れをきくゆるとなむ
いまはむかし豊後の家中のおとこ

まよゐめて主乃ころさんとしけれバ小ふねにのりて
にげて新羅国へわたりてかくれゐたりけるほど
に新羅乃きんかいといふところ乃いみじうのゝしりさわ
ぐなにごとぞとゝへバ虎乃こくふに入て人をくらふ也
といふこ乃男とふ虎ハいくつばかりあるぞとたゞ一
つあるがにはかに出きて人をくらひてにげていきゆく
するなりといふをきゝてこ乃男のいふやうあ乃
虎にあひて一矢をいてしなバやとらかしこくバ
ともにこそしなめたゞむなしうハいかでかくらはれん
此国の人ハ兵乃道わろきにこそハあめれといひけ
るを人きゝて国守にかうかう乃事をこそ此日本

申せといひけれバかしこき事かなよべといへバ人き
てめしありといへバまゐりぬまことにやこの人の
くふを安く射んとハ申すなるとゝはれけれバ
しか申候ひぬとこたふ守いかでかゝる事をバ申すぞと
とへバこ乃男のまうすやう此国の人ハ我身をバまた
くして敵を害せんと思へバおぼろけにてかやう
乃たけき獣などにハ我身のそんぜられぬべけれ
バまかりあハぬにこそ候めれ日本の人ハいかにも我
身をバなきになしてまかりあへバよき事も候ハ
弓矢にたづさハらん物なにしかハ我身をおもハん
事ハ候ハんと申けれバ守さてとらをバかならず射て

殺してん虎といひければ我身乃いきいかずハしらずかれ
をし侍りなんと申せバいとみじう
かしこき事かなさらバかならずかまへて射よいみ
じきよろこびせんといへバ男乃申やうさてもいづく
に候ふ人をバいかやうにて虎ハくひ侍るぞと申せバ守の
いはくいかなるをりにかあるらんこうの中に入きて人
ひとりをかしらをくらひてかたにうちかけてさるなりと。
この男申虎ハいかにしてかくらひ候ふと問へバ人の
いふ虎ハまづ人をくらハんとてハ猫の鼠を
うかゞふやうにひれふしてしばしありて口を
あきてとびかゝりてかしらをくらひてかたにうちかけてはし

さるなりといふとてもかくてもさハれ一矢射てこそく
らハれめその虎乃あらん所をしへよと
いへバこれより西に卅四町のきて麻の畠ありそれ
になんふすなり人おぢてあへてそのわたりへゆかず
といふおのれたゞしり侍らずともそなたをさして
まからんとて調度をとりていぬ新羅乃人く日本
乃人ハはかなし虎にくハれなんとあつまりてそし
りけりかくてこ乃男ハ虎のありどころきゝて行てみれ
バまことに畠はるかにおひわたりたりそのたけ
四尺ばかりなりその中をわけゆきてみれバまこと
に虎ふしたりそ乃とき矢はげてかたひざを

さてくわんゆうどもハ、この書状をきゝて、はいひしがりて
弓とりのぬしどもみなかしこまりてある状かの、弓を
たばさみてもせでかへるまじきぞとて、大口状あきこく、
かゞりてとのこめ、らふをかのこゝらを流すくれ
きそてうへにわかふ切り具足にて、矢数をもちおもむきぞ、
さしかれの士ども、さうきうもかいに七八寸ばかりのとがり矢を
射かけしに、さうさきにあたりて、そとをれくあたり状。
かうまくをとりかれこまかれ、膝をさしつらぬきしよし、太宰府にも射て
くれねよ状して、矢をもねらへて、御府にたてまつりしく
守ハかゝく射おろしけるよしハ、守かたへのく
さりて、かねものへ人をつかへて、かゝる事をぞ申しつかはしける

まなこよりおこゝなかく射とほされかかりやう
ゆめゆめたじまなどれ百千のきらかゝりてかうるも
日本乃人ハ十人ばかり馬にてとりむかひく射ればさう
あまりにさぎ状の乞んこの国の人も一尺ばかりの矢に
きりの羽つけたる矢をすぎてしかれバ毒(どく)をぬ
りて、ましだし流れしはかのぞくのゆへにしぬれども
さうらうまかりよろぶの庭に射ふせとハ見えしぞ。
日本人ハ我命下死するをも露ばかりもおしまず大将
先まてましだしれ庭にいさゝかし流きと兵の
ためも日本の人ハあまたのかへにもおかされども
よくいましめからしたしわかゆる世るるて

かちきりとさてこ乃をのこ、いみじきものとかしこそとめ
といひてありけれど、妻子をこひて、つくしにかへり
て宗行がもとにゆきて、そのよしかたりければ、日
本乃かほおこしたる者なりとて勘当も
ゆるしてけり。おほくのものども禄にえたりける
宗行にもとらせて、おほくの商人ども新羅乃人の
いふをきゝてかたりければ、つくしにもこの国の人
は兵はいみじきものにぞしけるとぞ
今は昔遣唐使にてもろこしにわたりける人
乃十ばかりなる子をえ見であるまじかりければ
ぐしてわたりぬ。さてすぐしけるほどに雪のいと
たかくふりたりける日、ありきもせでゐたりけるにこの
ちごのあそびに出ていぬるが、おそくかへりければ、あやし
とおもひて出て見れば、あしがたうしろのかたから
ふみていきたるにそひて、大なる犬乃足がたありて
それよりこのちご乃あしがたみえず。山ざまにゆきたる
を見て、これは虎のくひていきけるなめりとおもふに
せんかたなくかなしくて、太刀をぬきて足がたを
尋てゆくに、山乃かたにゆきて見れば、岩屋乃くちにこのちごを
食ころして腹をねぶりてふせり。太刀をひきもちてはしりよれば
えにげてもいかで、かいかゞまりてゐたる
を太刀にてかしらをうてば、鯉乃かしらをわるやうにわれ

ねつきよまくろうてさ滝よくさんとてくしつてしらぬ
せあり給ふてぜぜおは様とうらきりまてもぶくとあ
州までよ誠に死せざれども死よりもれてそこまでて歳に
みりせざれども有の国人くて見くおちあざむきとかぎ
ありあしもろちうの人て虎りよあれぬく遠き事ども
よかくきよかくとうもとやうちむ絡してよ縁をうゑ
しておきれどもろうし此人そいうぢ死期にいつて家を
日本乃国のよは其乃りくいあらい凡きよ有りと先で
来まをよ死されどなりてはせん
今もむりしよ上遠ア此まさ中将とや申る内へさいり
給ふ為よ清師をとをくへとくかてつきけるとおもえる

清師そうとそそ世きれかしちし給清のた利て比よりは
給しては色の有りとうたそれはまひとに羅をも地まき
もくまゆまれよそて知うきうよちしけるもの有と河原と
あくうちうれくもくき語きる人と乃清師ありまする所
此家国乃中も有くかしきれ家にして此ち見あきせよりけ
色いふしれきちと誠をもいれくきよ家の有と書く
思召さく道語れきる人に男をおく絶えて出でけ家
りよおえけよむてもて家拘そうとなりにまれそれ
も人まいか家おもぬれ入てとまて比つる物とこいる来て語
つもぬまでこれをとをくへとく湯りるけりをいれまれて
別乃おとをけまるものにしてそれをくへとする人を

見しつゝまれもあはれゆくとして堂に行ふところの念佛
志らく人の前に託め猟を家に志てうたく聲も甚濁れ
あるをみてもしめの法師をあはれと猟しくはゆるさん
さてとれ行ずるにつきの寺との前におりしまれはさの
行者家をと猟しは堂をかくゆのをかれけるさてあと
あく大数の声をあなも逢は猟しをゆうにきりさて
月ありつゝもあるる夜を見人を隠して家ばねがひ
家としきるところの中ね月とめて見ぐをみ行なる
あとにもつかがるをよく知りあると見猟師に
うしなさもかくれ家とよ座りにしてかねあまれ
まさむくいつにもかりみぬるともやりも猟しま

かゝるをみきゝてとくも寺のかへる山のきはく堂し
猟しきところへ行きて行く末のあとある座の前
猟をとまかくはくれりたまるにさしとをまてさうをまする
人もかく猟しけるやまとき事はひとへにほとけをもとく
いれあそて見しきのをみさしつさうれぬゆくあり
あかりさふりさむきるそて出て火猟山のさうく見とき
きれも夜風とも出家あてちかくまかくきれて
けるをとまてはあつ猟かわし行をはあはれさはさく
あ法よかくまてかく何よまねの座くかわし行をする
よ山の人きりてゆかし続りかう矢をば射るをと世あれ
もあるをれともみていかにとさきけるわとよ

雨乃ふるやうにいさせたりけれはこの方よ
りも射けれとあなたには人のかずおほく
てえいあふへくもなかりけるにや火乃ゆくゑもしらず射ち
らされてにげていにけりそのをりに男ひとりいて
きていかにおそろしくおぼしめしつらんをのれはその
月のその日からめられてまかりしを御徳にゆるさ
れて世にうれしく御恩むくひまゐらせはやと思ひは
べるに法師乃事をあしく仰られたりとて日比
伺ひまゐらせつるを見て候ひつるにつげまゐらせはやと
思ひなからわか身かくて候へはと思ひつる程にあか
らさまにきと立はなれまゐらせて候ひつる程にかく

つきは法師かたらひて出しまゐらせつるにあれはまゐらせていつ
ともまことりてとりまゐらせつるに殿をもしれいまや
はたへんもそろひてとて柱よりはくみ義してかくいひたる
まろしさふらひせはつるなりとてうれしさにかくこの世
やてきもかよをものゝぬへきとてうれしきあまりに
とあくるほとまてくらゐまきらせてうれしきにそまて
行くかく流ねといひてあれはまことしかともえはなさ
かしまゐるなり宮条大納言なりとくや海を
参らん
今はむかし陽成院おりゐさせ給ての御所は大宮
よりは北西洞院よりはにしあぶら小路よりは

東ゆきてかんあかをけるに大なる池のありけれは殿の
よまかれとの給ひけれは夜中ちかきにかへく
とあるよりてこの池にふかきをとろくひそて
きりをもちつしとれはくく太刀抜きてかく
しりて流れをよりまうて清黄の上下きたる男
のたちとれたりけれは色のとちへしまかなるかたへまうて
ちかくまうれつし給ひしぬしなりけるに鳴る子のすかりによ
しへよりこのとこへよもみさくく千二百余年に当る
かりて祢宜もくいゆるし祢へまて社をと申てこそ
祢へさるはいかゆとも清すりけてまかうんといひきる
とすまるを知と川けて八月十日の兄よしと院へ参て

あなうたといひまれもなく此男のいつちと申せて
三度とし清へまあきくまくかくてたくふくとなし
くかはる所を口にあきて心れまうりまうを申して
人なとなる男とみ家なとに知らるも太く大き
るかりて此仰とこ銭一くらににて参り
けは鳥羽院御時水無瀬殿よりあく山すかもかき
なとれ池の辺りて御堂へ入事ありまうて西
堂まてかなもて乃ちのとをめんくまの寺参上なこあり
そしてまる名せんと心よりまて日心し侍の書院
もあくて乃こるまうかよある夜景かさまうれ
ちる中将よ祢く絵に例の色ゐの抽屋まり

池乃うへをとをれ行けるにかきくもりて雨ふりて
あやしのきつね出てこよひ射たりければよこ
ろこびて池へかへり入地あたりなりけるのちに人にゑ
ぐ犬をせしとしてめでくれたまれし中に大かたに
むかし千年余りも前さとしたき者をよけ侍るまで
そ侍りける
つまをむかし一条桟敷屋にある男泊りてけい
せいと寝たりけるに夜中ばかりに風吹雨ふり
てすさまじかりけるに大路に諸行無常と詠じ
て過る者のあり何ものならんと思ひてしとみを
少しあげて見ければ長は軒とひとしきで馬乃

かしらなる鬼なりけりおそろしさにしとみをか
けておくの方へ入ければ此鬼格子をおしあけて
かほをさし入てよく御覧じつるよく御らん
じつると申ければ太刀をぬきて入らばきらんとかまへて女
をばそばにおきてまちけるによくよく御らんぜよと
いひてさりけり百鬼夜行にてあるやらんとおそろ
しかりけりそれより一条乃桟敷屋にはまたもとま
らざりけるとなん